

“こどもピースサミット 2024”

平和の意見文集



平和の意見発表会

令和6年6月8日（土）

西区民文化センター

広島市教育委員会

へいわ ちか 平和への誓い

め と そうぞう
目を閉じて想像してください。

みどりゆた うつく ひと しょうてんがい え がお
緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。

ねんまえ ひろしま いま か いろあざ にちじょう
79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

しょうわ ねん ねん がつむいか ごぜん じ ふん
昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

「ドーン！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

た のぼ くるみ しゆいろ くも
立ち昇る黒味がかかった朱色の雲。

ひと くさき や たす もと こえ ぜつぼう なみだ う つ
人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。

げん しぼくだん いろあざ にちじょう うば ひろしま はいいろ せかい か
原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

ひぼくしゃ わたし そうそぼ とうじ ようす かた
被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

ことば かな きおく ねん た いま おお ひぼくしゃ くる つづ
言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

いま せかい せんそう つづ
今もなお、世界では戦争が続いています。

ねんまえ おな い い ひと
79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、

あ す とも す ひと うしな ひと せかい
明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

ほんとう
本当にこのままでよいのでしょうか。

ねが へいわ
願うだけでは、平和はおとずれません。

いろあざ にちじょう まも へいわ わたし
色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

ひとりひとり あいて はなし き
一人一人が相手の話をよく聞くこと。

ちが よ たら じぶん かんが み なお
「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

なかま きょうりょく ひと な と
仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

わたし へいわ いっぽ
私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

へいわ きねん しりょうかん けんがく ひぼくしゃ ことば ふ
平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

かぞく ともだち へいわ とうと いのち おも かた あ
そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合ひましょう。

せかい か へいわ いっぽ いま ふ だ
世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

れいわ ねん ねん がつむいか
令和6年（2024年）8月6日

こども代表

ひろしま しりつぎ おんしょうがっこう
広島市立祇園小学校

ねん かとう あきら
6年 加藤 晶

ひろしま しりつ や はたひがししょうがっこう
広島市立八幡東小学校

ねん いしまる ゆうと
6年 石丸 優と

もくじ

がっこうめい 学校名	なまえ 名前	はっぴょう 発表テーマ	ページ
こうなんしょうがっこう 高南小学校	おちあんず 越智 杏	せかいじゅう 世界中のみんなが笑顔になるように	1
まがめしょうがっこう 真亀小学校	みやたけかえで 宮武 楓	へいわわ 平和の輪	3
ふなごししょうがっこう 船越小学校	しばためぐみ 芝田 恵	「じぶん」で輝く世の中を	5
やはたひがしょうがっこう 八幡東小学校	いしまるゆうと 石丸 優斗	ひばくしゃかな 被爆者の悲しみと今を生きるぼくたち	7
いつかいちちゅうおうしょうがっこう 五日市中央小学校	うめちとさとる 梅本 惺琉	ぼくたち 僕達にもできること	9
いつかいちみなみしょうがっこう 五日市南小学校	はらつむぎ 原 つむぎ	へいわはな 平和の花	11
ふくろまちしょうがっこう 袋町小学校	はしもとりお 橋本 莉央	へいわ 平和をつくるということ	13
せんだしょうがっこう 千田小学校	あだちさわ 足立 爽	かたおも 語られなかった思い	15
ひろせしょうがっこう 広瀬小学校	わたなべかつお 渡邊 克生	へいわせかいめざ 平和な世界を目指して	17
ほんかわしょうがっこう 本川小学校	はやしあき 林 亜希	たいせつ 大切にしたいもの	19
とうじょうしょうがっこう 東浄小学校	なるせたいが 成瀬 太臥	いのちよろこ 命に喜びをもって	21
わせだしょうがっこう 早稲田小学校	わたなべれんたろう 渡部 錬太郎	せんそう 戦争というおそろしさ	23
みなみしょうがっこう 皆実小学校	はまだそうた 濱田 想太	わすなみだ 忘れられない涙	25
うじなしょうがっこう 宇品小学校	まつもとさわ 松本 紗和	えがお 笑顔でいられる世界を築くために	27
ひろしまだいがくふぞくしょうがっこう 広島大学附属小学校	うちだはるき 内田 陽輝	まえにちじょう あたり前の日常	29
ひろしまだいがくふぞくしのめしょうがっこう 広島大学附属東雲小学校	いぎ 伊木 けい	かなつづせんそう 悲しみが続く戦争をなくすために	31
てんましょうがっこう 天満小学校	やまさきみずき 山崎 水稀	ひいおじいちゃんから受け継いだへいわ ひいおじいちゃんから受け継いだ平和のバトン	33
みなみかんのんしょうがっこう 南観音小学校	てらだけいた 寺田 啓太	ひとごと 他人事をなくすために	35
なかすじしょうがっこう 中筋小学校	おかむらそうま 岡村 颯真	しあわせわ 幸せの輪	37
ぎおんしょうがっこう 祇園小学校	かとうあきら 加藤 晶	こころ 心をひとつに	39



せ かいじゅう え が お
世界中のみんなが笑顔になるように

ひろしま しりつこうなんしょうがっこう お ち あんず
広島市立高南小学校 越智 杏

「ドーン！」

こ ま く やぶ おお おと ひろしま あおぞら ま くろ
鼓膜が破れるような大きな音が広島の青空を真っ黒にそめてしまいまし
た。まわ たす さけ ごえ わたし
た。周りには、助けてという叫び声がひびきわたっています。これは、私が
へい わ きねん しりょうかん み こうけい こわ わたし とき む い
平和記念資料館で見た光景です。怖かったですでしょうか、私はその時、無意
しき みみ ふさ さい とき はなし へい わ がくしゅう かさ
識に耳を塞いでしまいました。7才の時の話です。それから平和学習を重ね
るうちにこれは、ほんとう ねんまえ ひろしま お に ど く かえ
るうちにこれは、本当に79年前の広島で起き、もう二度と繰り返してはいけ
ないことだとあらた かん
改めて感じました。

ねんせい なつ わたし がつ か がつ か か かん ひろしま ながさきし じどうせい と
5年生の夏、私は8月3日から8月5日の3日間、広島・長崎市児童生徒
へい わ さん か わたし ながさきし しょうがくせい ちゅうがくせい
平和のつどいに参加しました。そこで、私は、長崎市の小学生や中学生と
こうりゅう じぶん へい わ おも かんが はっぴょう あ きかい
交流し、自分の平和についての思いや考えを発表し合う機会がありまし
た。はな あ まえわたし なか せ かい せんそう ぼくぜん
た。話し合いをする前私の中には、世界から戦争をなくしたいという漠然と
おも
した思いしかありませんでした。ですが、せ かい せんそう わたし
ちは何をすればよいかを議論し世界がどうなってほしいのか、未来について
かんが
考えることができました。そして、はん ひと はな あ い けん
考えることができました。そして、班の人たちと話し合ってまとまった意見
は、「このせ かい せんそう な み ちか え が お ふ
世界から戦争を無くすためにはまず身近なところから笑顔を増やそ
う。」という意見でした。みんなが笑っていられるような場所を作ることで笑
が お ふ ひろしまじゅう ひろ にほんじゅう ひろ せ かいじゅう ひろ
顔が増え、それが広島中に広がり、日本中に広がり、そして世界中まで広
がります。わたし ともだち わら わら え が お
がります。私は、友達と笑い、クラスメイトと笑い、みんなが笑顔になれる
ぼしよ ふ ひろしま ながさき じどうせい と へい わ ほか
場所を増やしていきます。この広島・長崎児童生徒平和のつどいでは、他にも
ひろしまへい わ きねん しりょうかん けんがく ひとめ み
広島平和記念資料館への見学のプログラムもありました。そこには、一目見

て私の心に焼き付いてはなれない展示物がありました。それは、人影の石です。この人影の石は、「死の人影」と呼ばれていました。石には、黒い痕が残っていて本当にここに人が座っていたのだと考えると、とても怖くなりました。家に帰ってもまだ人影の石のことが心に残っていました。気になって人影の石のことを祖母に聞いてみると、

「あの石は、あなたから見てひいひいおばあちゃんが座っていたと資料が残っているんだよ。」

と言われました。私は、その時初めてその話を聞いたのです。さらに興味がわき、インターネットで調べてみると、人影の石は、時間が経つにつれて影がうすくなっているということが分かりました。私は、そのことを知って、8月6日に起きた戦争の事も忘れられてしまいそうな気がしてとても怖くなりました。そして、たくさんの命と生きる希望を奪った原子爆弾は、決して許されるものではないと、より強く感じました。広島の場合は、原子爆弾投下直後「75年は草木も生えぬ」とも言われ続けましたが、今では、緑が満ち溢れています。今の広島があるのは、広島の人々の「復興させたい。」という強い思いがあったからです。そして、平和を愛し、平和を願う心があったからです。私は、その思いや心を大切に、このすばらしい広島を守り続けていきたいです。その国の伝統や文化を守るため、大切な命や生きる希望を奪う戦争は、絶対に許してはなりません。平和のつどいでの出会いのおかげで、私は末永く平和を願う心と、友情の絆を育むことができたのです。

この世界から戦争をなくすため、身近なところから笑顔を増やし、すばらしい広島を次世代に残していくことが大切です。だからこそ私は、いろいろな人と仲良くなりみんなが笑顔になれる場所をつくりたい。世界中のみんなが、笑顔で安心して生活を送れるように。



へいわ わ 平和の輪

ひろしま しりつ まがめしょうがっこう みやたけ かえて
広島市立真亀小学校 宮武 楓

「話」「和」「輪」。これは、ぼくのクラスの学級目標です。話すの「話」、和むの「和」、そして、つながるの「輪」。言葉と言葉でつながり、笑顔が増え、心でつながる。ぼくは、そんな人との「輪」を大事にして生活しています。大きい世界から見た日本は、とても小さく見えます。その小さな日本の中にある平和の輪は、世界全体の中では、とても小さなものかもしれません。何もせず、ただ時間が過ぎていくと、その輪はよりもろくなっていきます。しかし、戦争や原子爆弾について話してくださる方の思いを受け継ぎ、広げていけば、小さな平和の輪は大きく、そして固くなっていく、ぼくはそう思います。

ぼくが、保育園に通っていた頃、テレビで戦争についての映像を見たことをよく覚えています。たった一発の原子爆弾で、広島のマチの上空に、巨大なきのご雲ができたこと、爆風で建物がたおれ、人が人ではないかのようになっていたこと。平和が当たり前だと思っていたぼくは、戦争が初めてこんなにおそろしいものだと知りました。その映像を見た後、いつもより食欲がわからず、心が押しつぶされそうになりました。

5年生のときには、「いわたくんちのおばあちゃん」の娘さんである岩田美穂さんから話を聞きました。ただ当たり前の日々を過ごしていただけなのに、戦争によって全てが奪われました。幸せだった日々の思い出さえ辛い出

来事きごとに変わかってしまうのだと感かんじました。心こころの傷きずはずなとおと治こることなく残のこり

続つづけてしまう、戦せんそう争そうはそうおもいものだと思おもいます。最さいご後いに岩いわ田たさんは、

「自しぜん然へいに平わ和おとずは訪おもれないい。」

とおおっしやしっていました。6年ねんせい生せいにないまった今いま、平へい和わの輪わをつなつげるたために、ぼくにももできるでることがああります。

1目めは、相あ手てとつなつがるたための工く夫ふうです。1年ねんせい生せいとの会かい話わの中なかで、自じ分ぶんの言ことばがううままく伝つたわわっていななかかつたつと感かんじることがあありました。相あ手てとつなつがるには、分わかりこやすい言ことばをええららぶこと、時ときには動どう作さでつたつた伝えること、このようように相あ手てに合あつた伝つたえ方かたをたいせせつきづづすることが大たい切せつだきと気きづづきました。

2目めは、温あたたかい言ことばがけです。ぼくのクなラまスは、仲なかまの発はつげんんたいにはん対たいして反はん応おうしたり、一いっしょよろこに喜よろんだりすることができできます。「すすごごいいね。」「ナナイス。」とといいう一ひと言ことで、相あ手てに安あんしんかんをあたあたえることができできます。それが、1年ねんせい生せいとの間あいだにももひろひろがり、いついつししか、1年ねんせい生せいの方ほうからなままえよにえがおかかけ寄よって話はしかけてくれるようようになりなりました。人ひとを大たい切せつにする行こう動どうで、心こころと心こころがきつなつががつたつ気きがしましました。

このようように小ちいさな平へい和わの輪わを一人ひとりがふ増ふやしていくことことで、その輪わは固かたく、大おおきな平へい和わの輪わとなおもっていくと思おもいます。

ぼくにももできるでる。平へい和わのたために。

「話わ」「和わ」「輪わ」

言ことばから心こころへ。ぼくから世せ界かいへ。平へい和わの輪わをつなつないでいきます。



「自分」で輝く世の中を

ひろしま しりつふなこししょうがっこう しばた めぐみ
広島市立船越小学校 芝田 恵

わたし せんそう ふんそう けつ おも わたし そうそぼ
私は、戦争や紛争は決してしてはいけないことだと思ひます。私の曾祖母
は、いま いき ひ と ひばくしゃ そうそぼ ひばく
は、今はもう息を引き取ってしまひましたが被爆者でした。曾祖母は、被爆を
したあともずっと からだ なか は へん と のぞ
したあともずっと 体の中にガラスの破片があり、取り除くことはなかつた
と、わたし き まど ひばく そうそぼ からだじゅう
と、私は聞きました。窓ガラスのそばで被爆した曾祖母。体中にガラスの
は へん つ さ こんらん おも なか わたし そうそ
破片が突き刺さり、ひどく混乱していたと思ひます。そんな中で、私の曾祖
母は ひ うみ なか に かぞく ともだち さが さが
母は火の海の中を逃げまどい、「家族」「友達」を探そうも探せなかつた。これ
は わたし そうそぼ はなし い い い
は私の曾祖母だけの話ではありません。生きたくても、生きることができな
かつた ひと あ す す ひと ひ う し な ひと ひ さかい
かつた人。明日をともに過ごす人をあの日、失ってしまった人。あの日を境
に、 かず おお ひと びと たい せつ か おも そう そ ぼ
に、数多くの人々の大切なものが欠けてしまつたと思ひます。この曾祖母の
はなし そ ぼ き わたし せん せい げん いん えい き ょう し おも
話を祖母から聞き、私は戦争の原因や影響を知りたいと思ひようになりま
した。 いま か ぞく とも だち わら な はげ あ
した。今、家族や友達と、ともに笑い、ともに泣き、励まし合う。このいっし
ゆんを す ひと し
ゆんを過ごすことができなかつた人が、たくさんいたということを知りま
した。

ひばくしゃ かたがた こう れい か す す と
被爆者の方々の高齢化は、どんどん進み、止まることはありません。なので、

わたし わか せ だい こう せい せん せい くる ひ つた
私たちのような若い世代が、後世に戦争の苦しみや悲さんさを伝えていくこ

とが大切たいせつです。自分じぶんが今いまこうして笑わらっている場所ばしょでも、以前いぜんは誰だれかが泣なきさけ
び、多おほくの命いのちが失うしなわれた場所ばしょだということけつを、決わすして忘わすれてはいけません。

大切たいせつな人ひとを大切たいせつにできて、大切たいせつなものを大切たいせつにできる。こういう世よの中なかを当あた

り前まえだと思おもう人ひとがたくさんいることは、おかしおかしくないののかもしれませんが、

が、人ひとを、自分じぶんを、そして今いまを、大切たいせつにできる人ひとがもつと増ふえるといいなと、

思おもっています。

そのためために、私わたしは、日頃ひごろから「差別さべつ」をしないように心こころがけています。「私わたし

の友とも達だちだから」や、「この人ひと苦手にがてだからなあ」と、自分じぶんの想おもいで態たい度どや言こと葉ばを

変かえてしまうのは、しょうがないののかもしれませんが、このしょうがない

いをしょうがないまま放置ほうちしてしまうのは、良よい方ほう法ほうとは言いえないのではな

いでしょうか。「女じょ性せいだから」男だん性せいなんだから」と、性せい別べつで大おおきく扱あつかい方かたが

違ちがうこと、「A国こく出しゅ身っしんだから」目めのいろ色ちがが違ちがうから」と、生うまれや人じん種しゅで大おおき

く扱あつかい方かたが違ちがうこと。どどちらも、考かんえ方かたささえ変かえることができかれば、この「違ちが

い」は「良よさ」へへと変かわります。今いま、性せい別べつのことや住すんでいるままちのルルールな

どで悩なやんでいる人ひとが少すこしでも減へり、やがては自分じぶんの悩なやみや相あ手ての悩なやみを理り解かい

し合あい、公こう平へいが全すべての人ひとや動どう植しょく物ぶつへ届とどくよような世せ界かいにしていいきませんか。私わたし

はそそういいう笑え顔がおああふれる世せ界かいにななるこことを、強つよく、強つよく、願ねがっています。



被爆者の悲しみと今を生きるぼくたち

ひろしま しりつ や はたひがししょうがっこう いしまる ゆうと
広島市立八幡東 小学校 石丸 優斗

「生き残ったのは私だけでした。」

被爆者の方の話 を聞いた時に、この言葉が強く 心に残りました。ぼくは、
あの日あの時の風景、様子、人々の声、気持ちをできる限り想像しました。そ
して、改めて、地ごくのような出来事や人々の苦しみを感 じました。

今、世界では、ウクライナやパレスチナなどで様々な争いが起きています。
そのようなことが続くと、第3次世界大戦に近づき、広島や長崎のように地ご
くのような出来事が再び起こってしまう国が出てくるのではないでしょ
うか。また、戦争だけでなく、貧困などで「食べ物がない。」「水がない。」「家
がない。」とつらい思いをしている人達もいます。世界中の人達が、あたり前の
生活を送り、幸せに生きることが出来る。それを平和というのだとぼくは思
います。

そんな世界の状況を日本ではどのようにとらえているのでしょうか。
「戦争が起こっているな。かわいそうだな。」と、遠い国の自分とは関係のな
いことだとして軽い気持ちでとらえている人が多いと思います。「戦争はダ
メ。」と口では言っていますが、戦争の本当のおそろしさや悲さんさをわかっ
ていないのです。実は、これまでのぼくもそうでした。平和な日本では、すぐ
に、「死ね。消えろ。」と言う人がいます。その一方で、世界では、「死にたく
ない。」「生きたい。」と願っている人がたくさんいるのです。大切な命が失
われているこの現状や、命の重みがわかっているならば、簡単に「死ね。」と
いう言葉を使うことはできないはずです。

ぼくのひいおばあちゃんは、被爆者ですが、直接原子爆弾の話^{ひ ぼくしゃ ちよくせつげん し ぼくだん はなし き}を聞いたこととはありません。ただ、身近な^{み ぢか}ところに被爆者^{ひ ぼくしゃ}がいたということで、ぼくは、わかっているつもりでした。でも、被爆者^{ひ ぼくしゃ}の方^{かた}のお話^{はなし}を聞き、今^{いま}まであの日^ひの真実^{しんじつ}がわかっていなかった^きことに気づきました。被爆者^{ひ ぼくしゃ}の方^{かた}は、自分の体験^{じぶん たいけん}を話^{はな}したくなかった^いと言っておられました。実は、ぼくの父^{じつ}も、ひいおばあちゃんからあの日^ひの話^{はなし}を直接^{ちよくせつき}聞いた^{こと}がない^{こと}だそうです。言葉^{ことば}にすることで思い出^{おも}したくない^だことを再び^{ふたたび}思い出す^だつらさを考^{かんが}えると、ぼくは、ひいおばあちゃんのその気持^きちがわかった^き気がします。そして、語り^{かた}つぐ難^{むずか}しさも感じ^{かん}ました。

今^{いま}、被爆者^{ひ ぼくしゃ}の方^{かた}が、年々^{ねんねん}減^へってきています。そんな中^{なか}、被爆者^{ひ ぼくしゃ}の苦^{くる}しみや悲^{かな}しみ、戦争^{せんそう}のおそろしさが、世界中^{せ かいじゅう}の人^{ひと}にきちん^{つた}と伝わ^{つた}っていないのではない^いでしょうか。世界^{せ かい}のニュースやぼくの周り^{まわ}の様子^{ようす}を見^みているとそう思い^{おも}ます。

そんな今^{いま}を变^かえるために、原子爆弾^{げん し ぼくだん}や戦争^{せんそう}について、みんなが関^{かん}心^{しん}をもち、知^しる努^{どりよく}力^{りき}をすることが大^{だい}事^じだと思^{おも}います。そうすれば、そこにいる人々^{ひとびと}の思^{おも}いや痛^{いた}みを深^{ふか}く感^{かん}じ、自分^{じぶん}のこととして考^{かんが}えることができるはず^{はず}です。それは、きつと戦争^{せんそう}を止^とめる力^{ちから}になるはず^{はず}です。そして、「死^しね。消^きえろ。」という言葉^{ことば}もな^なくす力^{ちから}になるはず^{はず}です。

広島^{ひろしま}に生^うまれたぼく達^{たち}が、被爆者^{ひ ぼくしゃ}の思^{おも}いや願^{ねが}いを心^{こころ}に刻^{きざ}み、未^み来^{らい}に向^むけて平和^{へいわ}の大^{たい}切^{せつ}さを発^{はっ}信^{しん}してい^いくべき^{べき}です。そのために、家^か族^{ぞく}や友^{とも}達^{だち}と平和^{へいわ}の尊^{とうと}さや命^{いのち}の重^{おも}みについて、も^もつと^もつと語^{かた}り合^あっ^てい^いくことが、世^せ界^{かい}を变^かえる一^{いっ}歩^ぽにな^なると思^{おも}います。世界^{せ かい}中^{じゅう}の平和^{へいわ}につな^{つな}がる、世界^{せ かい}中^{じゅう}の全^{すべ}て^{ひと}の人^{しあわ}の幸^{さいわい}せにつな^{つな}がる一^{いっ}歩^ぽを、ぼくはふみ出^だしたい^{たい}です。



ぼくたち
僕達にもできること

ひろしま しりつつ か いちちゅうおうしょうがっこう うめもと さとる
広島市立五日市中央小学校 梅本 惺琉

ねん がつ ひろしま ながさき げんし ぼくだん お ことし ねん た
1945年8月、広島、長崎に原子爆弾が落とされてから、今年で79年経
ちます。

へいせい う ぼくたち せんそう けいけん み ちか はなし
平成に生まれた僕達は、戦争を経験したことがなく、けっして身近な話で
はありません。しかし、79年経った今でもこの広島^{ひろしま}の街^{まち}には、その戦争^{せんそう}の傷^{きず}
あと おお のこ
跡が多く残っています。

ひろしまし そ ふ ぼ いえ ふる しろくろ しゃしん かざ しゃしん
広島市にある祖父母の家には、古い白黒の写真が飾ってあります。その写真
には、せいふく き わか おんな ひと うつ ぼく すこ き
制服を着た若い女^{おんな}の人が写っています。僕は、少し気^きにかかりながら
も、その写真^{しゃしん}について、いま だれ き
今^{いま}まで誰^{だれ}にも聞いたことがありませんでした。

とき しゃしん はは はなし き かい ぼく はは はなし
ある時、その写真^{しゃしん}について母^{はは}と話^{はなし}をする機会^{き かい}がありました。僕は、母^{はは}の話^{はなし}
き しょうげき う しゃしん おんな ひと そうそ ふ いもうと げんし ぼくだん
を聞いて衝撃^{しょうげき}を受けました。その写真^{しゃしん}の女^{おんな}の人は、曾祖父^{そうそ ふ}の妹^{いもうと}で原子爆弾^{げんし ぼくだん}
えいきょう な ぼく じゅぎょう えいぞう さまぎま ばめん せんそう
の影響^{えいきょう}で亡^なくなっていたのです。僕は、授業^{じゅぎょう}や映像^{えいぞう}など様々な場面^{さまぎま}で戦争^{せんそう}に
まな き かい はなし き せんそう じっさい お
ついて学ぶ^{まな}機会^{き かい}がありましたが、その話^{はなし}を聞いても、戦争^{せんそう}が実際^{じっさい}に起こった
こととは思^{おも}えず、どこか遠^{とお}い時代^{じ だい}の遠^{とお}い国^{くに}の話^{はなし}のように思^{おも}っていました。

しるくろ しゃしん み ちか せんそう しょう こ のこ
しかし、その白黒^{しろくろ}の写真^{しゃしん}には身近^{み ちか}に戦争^{せんそう}があったのだという証^{しょう}拠^こが残^{のこ}って
いました。僕は、ゾッとしました。

せ かい いま さまぎま ばしょ せんそう お じゅぎょう き おそ
世界^{せ かい}では、今^{いま}も様々な場所^{さまぎま}で戦争^{せんそう}が起こっています。授業^{じゅぎょう}で聞いた恐^{おそ}ろし
こうけい いま せ かい お
い光景^{こうけい}が、今^{いま}も世界^{せ かい}のどこか^{どこか}で起^おこっているのです。

へいわ くに にほん う そだ にほん こうけい せかい おな
平和な国である日本で生まれ育ち、その日本の光景が世界でも、同じように
ひろ
広がっていると思っ
おも
ていましたが、それは誤解でした。
ご かい

せ かい いま にぎ ひと ころ たたか ひと
世界では今も、じゅうを握り、人を殺すために戦っている人がたくさんい
るのです。そして、その戦争によって、ご飯を十分に食べられなかったり、
がっこう かよ いのち お ひと ひと
学校に通えなかったり、命を落としてしまう人もたくさんいるのです。人の
いのち
命をうばう戦争を、このまま放っておいてはいけません。広島で生まれ育つ
ぼくたち せんそう かえ しめい
た僕達には、戦争をくり返させないという使命があります。

へいわ にほん そだ ぼくたち いったいなに しょうがくせい
しかし、平和な日本で育った僕達は一体何ができるのでしょうか。小学生
ぼくたち なに い ひと ぼく
の僕達にできることは、何もないと言う人がいるかもしれません。しかし、僕
は、そうは思いません。僕達にでもできることは、たくさんあるはず
おも ぼくたち
です。

へいわ はっしん ひと おも へいわ り かい
平和について発信することその一つだと思
ひと おも
います。平和についての理解
しゃ ひとり ふ せ かい よ ほうこう む せんそう すこ
者が一人増えるだけでも、世界はより良い方向に向かっています。戦争は少
しのきっかけで起こります。逆に、少しのきっかけで戦争を止めることも
お ぎやく すこ せんそう と
できるはず
おも
です。

きょねん ひろしま おお がいこくじんかんこうきやく へいわ こうえん
去年の広島G7サミットのえいきょうで、多くの外国人観光客が平和公園
へいわ きねん しりょうかん おとず し
や平和記念資料館に訪れていると、テレビのニュースで知りました。これも、
へいわ かんが おも
平和について考えるきっかけになっていると思
おも
います。

ひとりひとり ちから ちい ちから あ みらい
一人一人の力は小さいかもしれませんが、みんなで力を合わせれば、未来
よ ほうこう む かくしん いつ かい ちちゅうおうしょうがっ
はもっと良い方向へ向かうと確信しています。まずは、この五日市中央小学
こう なかま とも きょうりょく はっしん おも
校の仲間と共に協力し、発信していき
おも
たいと思
おも
います。



へいわ はな 平和の花

ひろしま しりつつ かいちみなみしょうがっこう はら
広島市立五日市南 小学校 原 つむぎ

「たくましく やさしく 正しく」

この言葉は、五日市南 小学校が大切にしている校訓です。わたしは、この

3つの言葉には、1つ1つに意味が込められていると思っています。

この間、校長先生が平和学習の授業をしてくださいました。校長先生

は、わたしたちに、

「平和とは何ですか。」

とたずねられました。

平和といえば、1945年、8月6日、午前8時15分、原子爆弾が落とさ

れ、言葉で表現できないほど悲惨な状況になった広島。原子爆弾から生き

のびた人々にも、心に深い傷を負わせた、あの日。そこから復興に力を注が

れ、今の平和な広島になりました。

でも、そこで終わってしまっは、このことを忘れてしまっははいけません。

このことを次の世代に語り継がなくてはなりません。そして、次の世代へと語

り継いでいくのは、わたしたちです。被爆者の方や、原子爆弾で亡くなった方

々の思いを受けついでいかななくてはなりません。そのために、

「たくましく やさしく 正しく」

という心をもたなくてはなりません。

「たくましく」を身に付ければ、自分に自信や責任をもっともつことができ

ます。「やさしく」を身に付けば、人に思いやりをもって接したり親切にしたりすることができます。「正しく」を身に付けば、正しい行動をとったり、どんな時でも、正しい道を歩んでいったりすることができます。

この心を一人一人が大切にすれば、世界が初めて平和になると思います。

それでわたしたちにも、平和にするためにできることがあります。それは、身近な所にある、小さな「平和」という花を咲かせることです。どういうことかという、例えば、友達とけんかして、仲直りした時。これも平和です。こんな時に、小さな「平和」という花が咲くのです。

花といえば、私たちが4年生だった時、広島市の「学校を花で飾る取り組み」で「たねダンゴ」を植えて育てる活動を行いました。土のダンゴの中に、種を丁寧にに入れて、花を育てる方法です。私たちは、その方法で育てた花を校内に配る活動もしました。学校が花でいっぱいになり、笑顔があふれました。この時も、「平和」という花が咲いたと思いました。

この活動を思い出すと、「平和って花によく似ている。」と考えるようになりました。花は、もともとそこに生えていたわけではありません。人の手や自然の力で育てられたものです。平和も同じように、もともとあるものではなく、人と人が関わり合い、助け合い、協力することによって初めて「平和」へと発展していくのです。

「たくましく やさしく 正しく」

五日市南小学校で私たちは、この校訓を大切に、小さな「平和」という花を咲かせ、平和の第一歩を歩み出していきます。



へいわ 平和をつくるということ

ひろしま しりつふくろまちしょうがっこう はしもと り お
広島市立袋町小学校 橋本 莉央

ひとびと へいわ ねが せ かい かく ち せんそう や ひ
人々がいくら平和を願っても、世界各地で戦争は止みません。まるであの日
ひろしま お おお いのち うば ひげき おな あやま
広島で起きた多くの命が奪われた悲劇がなかったかのように、同じ過ちを
く かえ
繰り返しています。

わたし そうそぼ そぼ ばくしんち い ない ひばく たす げん し ばく だん
私の曾祖母と祖母は、爆心地1km以内で被爆して助かりました。原子爆弾
そうそぼ くち と はは き め と
について曾祖母は口を閉ざしていましたが、母が聞けば、いつも目を閉じ、ま
ひ め まえ み はな
るであの日を目の前で見ているように話してくれたそうです。

ひ あさ そうそぼ さい そぼ ちち いえ つぶ
あの日の朝、曾祖母は0歳の祖母に乳をあげていました。いきなり家が潰れ、
どうにかがれきの中から外に出ましたが、祖母を探しに又当てもなく戻った
なか そと で そぼ さが またあ もど
のです。丁度祖母が泣き出し、その声を頼りに手を伸ばすと、足があつて引
ちようど そぼ な だ こえ たよ て の あし ひ
っぱり出し外に出たところ、辺り一面焼け野原と化していました。町内会長
こえ かわ に かわ すい あ
さんが声をかけてくれて、川へ逃げました。川はどんどん水位が上がってきて、
おんぶしていた祖母がおぼれないように一緒にいた人が支えてくれました。
け が お みな かわ なが ひっし たが からだ
怪我を負いながらも皆は川に流されないように、とにかく必死にお互いの体
ささ あ くろ あめ のが はし した
をつかんで支え合っていました。黒い雨を逃れたのは、橋の下にいたからだ
いいます。

じかん た わ そうそぼ じっか みなみく そぼ
時間がどれだけ経ったか分かりません。曾祖母は実家のある南区まで祖母
ある たくさん したい たす こえ き
をおぶって歩きました。沢山の死体と「助けてくれ。」という声を聞きながら
ひっし ある とき こうけい しんじょう なにじゅうねん た そうそぼ くる
必死に歩くしかなかったその時の光景と心情は何十年経っても曾祖母を苦
つづ せ なか とき あ へん はい のこ はなし き
しめ続けました。背中にはその時浴びたガラス片と灰が残っていて、話を聞
はは どうじ じょうけい なまなま かん かえ つ
く母も当時の情景を生々しく感じずにはいられなかったとといいます。帰り着
ふたり すうじつこうねつ つづ やくざいし びょういん はたら そうそふ
いた二人は数日高熱が続きました。薬剤師として病院で働いていた曾祖父
こおり じてんしゃ つ ころ ちい まいにちとど
が氷を自転車に積んで、着く頃には小さくなっていましたが、毎日届けたそ
うです。

わたし そうぞう で き のこ ひとたち ご かな た あ
私には想像すら出来ません。残された人達がその後、悲しみから立ち上
り復興に向けて努力してくれたおかげで今の広島は作られています。曾祖父
母も、薬が足りず、全ての人に行き届かなかった虚しさと助けられなかった
無念さから薬の卸問屋を始め、流通に尽力しました。きっと色々な人達の
思いが交差して、絶望から希望の街を作ったのです。

いのち つな むずか きせき わたしたち で き ごと まな ぼうりよく
命を繋ぐ難しさと奇跡を私達はあの出来事から学ぶべきです。暴力を
用いて戦い、得られるものに価値はあるのでしょうか。命より尊いものは
ありません。小さな家族の幸せを全て奪い、得られるものはあるのしょう
か。私達は平和を願うといますが、願ったところで容赦なく戦争は起きて
います。だから平和はつくるものだと私は考えます。

こども わたしたち つよ もの せんせい おや たす もと
子供の私達はすぐに強い者の先生や親に助けを求めがちです。でも、もっ
とちゃんと子供同士の話し合いで解決する力をつけないといけません。強
い者がどちらかの味方をすれば一見問題解決したように思えますが、一方の
気持ちは納得していません。譲歩し合うということを学ばなければなりません。
また、ニュースを見ていると、些細な事で殺人が起こっています。大人達
ももっと歩み寄れる人間であってほしいです。そうして平和をつくっていかな
ないと真の平和にはなりません。

ひろしま う そだ むり やり うば ち ねむ たましい
この広島で生まれ育ったからこそ、無理矢理奪われたこの地に眠る魂の
叫びを感じずにはられません。悲しみは今も消えていないのです。曾祖母か
ら繋がられた大切な命だからこそ私は人に優しくありたいと思います。自
分の為でなく、恩返しの為に生きたいと思います。生かされた人達がつくって
くれたこの素晴らしい広島は、世界中のどこよりも笑顔溢れる街にしていかな
なければいけません。

わたしたち い けんり いのち まも けんり くに いま
私達には生きる権利があります。命を守る権利があります。もし国が今の
常識で戦争を始めようとしたら、私達は全力で止めないといけません。皆
が同じ気持ちであれば、平和はきつとつくることができます。



かた おも
語られなかった思い

ひろしま しりつせん だ しょうがっこう あだち さわ
広島市立千田小学校 足立 爽

ひ かた
「あの日のことは語りたくない。」

おも ひ ばくしゃ かた
そう思っている被爆者の方もいます。

わたし はは き ひ ばくしゃ ひと わたし じぶん み
私が、母から聞いた被爆者もそういう人でした。これまで私は、自分の身
ちか ひ ばく ひと おも ひろしま げんぱく お
近くに被爆した人はいない、とっていました。しかも、広島に原爆が落とされ
たのはずっと昔のことで、私には縁遠いものだと思っています。私が母
から聞いたのは、母の祖父のお姉さんで、「西原キクエさん」という人の被爆
たいけん
体験です。

はは しょうがっこう ねんせい とき なつやす ひ ばくたいけん き
母は、小学校6年生の時、夏休みにキクエさんに被爆体験を聞きたいとお
ねが とき はは よろこ はな おも
願いしました。その時、母は、キクエさんは喜んで話してくれると思ってい
ましたが、キクエさんは「嫌じゃ。」と言って、部屋から出て行ってしまいま
した。

ひ ゆうがた はは よ よ いちにちじゅうかんが
しかし、その日の夕方、キクエさんは母を呼び寄せ、「一日中 考えて、も
う二度とあんなことは起きてほしくないけえ、これまで誰にも話したことは
ないけど、話すことに決めたよ。しっかり聞いてね。」と言って、あの日のこ
とを聞かせてくれたそうです。

ねん がつ か あさ しんぶんしゃ つと おっと み おく あと
1945年8月6日の朝、キクエさんは、新聞社に勤める夫を見送った後、
ひらつかちょう いま ひがしひらつかちょう あね いえ る すばん とき ひ ばく
平塚町、今の東平塚町にあった姉の家で、留守番をしていた時に被爆しま
した。爆風で一瞬にして倒壊した家の下敷きになりながら、なんとか自力で
はい出したキクエさんが目にしたのは、原爆で倒壊した広島町でした。何が

起きたのかわからないまま、キクエさんは夫を探すため、変わり果てた町をさまよいました。その時、今の私と同じくらいの女の子に助けを求められました。でも、キクエさんはどうすることもできず、目の前で女の子は亡くなってしまいました。結局、夫も見つからず、一人でひたすら歩いて、呉の倉橋にある実家へ戻りました。

「その時の女の子が忘れられんのじゃ。地獄じゃった。」戦後45年以上経っても、キクエさんはそう言っていたそうです。

キクエさんはなぜ被爆体験を語りたくなかったのでしょうか。私は、被爆のことを思い出したくなかったからだと思います。それでも、母に話してくれたのは、このまま話さずにいれば、自分の見てきたあの日のことがどこにも残らず無くなってしまおうと思ったからだと思います。

母は、私に、「キクエさんの思いを覚えていてほしい。」「広島に生まれ育った私たちは、広島で起きたことを伝えていく責任があると思う。」と言いました。

今、広島は79年前に焼け野原になったとは思えないほど、緑豊かで美しい街になっています。でも、その過去には、語られたつらく悲しい体験だけでなく、それ以上に語られなかったつらく悲しい体験がたくさんあったはずで、被爆体験を伝えている被爆者の方も、もしかしたら本当は伝えたくなかったかもしれません。だから、今の私にできることは、被爆体験や伝承講話を聞けることが当たり前だと思わずに、話してくれた人の生き方や起こったことを聞き、想像できるようになることです。そして、今の私を知っていることをまだ知らない人に正しく伝えていきたいです。



へいわ せかい めざ
平和な世界を目指して

ひろしましりつひろ せしやうがっこう わたなべ かつお
広島市立広瀬小学校 渡邊 克生

がつ か ひ ぼく たんじやうび とくべつ ひ
8月6日、その日は僕の誕生日で、特別な日です。ヒロシマにとっても、
わす たいせつ ひ たいせつ ひ わす ねんかん
忘れてはならない大切な日です。その大切な日を忘れないために、この5年間
へいわ がくしやう とお まな ぼく おも かん の
の平和学習を通して学んだことから、僕が思ったことや感じたことを述べ
ます。

め ひろしまへいわ きねん しりやうかん い げんし ぼくだん ひがひ ひとびと
1つ目は、広島平和記念資料館に行って、原子爆弾の被害にあった人々の
すがた あらた げんし ぼくだん おそ かん げんし ぼくだん
姿をみて、改めて原子爆弾は恐ろしいと感じたことです。原子爆弾によって
たいせつ かぞく ゆうじん な い のこ かな ひと ほうしやせん あ
大切な家族や友人を亡くし、生き残っても悲しみをかかえる人や、放射線を浴
くる ひと おお げんし ぼくだんとうか ご ひろしま い じごく いま
びて苦しむ人が多くいて、原子爆弾投下後の広島は生き地獄でした。今もまだ、
せんそう くに ひがひ ひろしま げんし ぼくだん お きず
戦争をしている国があります。その被害は、広島に原子爆弾が落ちて傷ついた
ひとびと おな じやうたい に ど せんそう お
人々と同じようにひどい状態になっています。だから二度と戦争を起こして
ぼく ひろしまへいわ きねん しりやうかん つよ かん せかい つた
はならないと、僕が広島平和記念資料館で強く感じたことを世界に伝えてい
きたいです。

め おがたしずこ しゆき き じっさい げんし ぼくだん ひがひ ひと
2つ目は、尾形静子さんの手記を聞いて、実際に原子爆弾の被害にあった人
きも わ げんし ぼくだん お あと い のこ ひと
の気持ちがよく分かったことです。原子爆弾が落ちた後も、生き残った人たちは
べつ くる かな たいけん きず なお びやうき
は別の苦しみや悲しみを体験されていました。傷が治らず病気に罹ったり、
いっしやうなお きず お くる あめ あ きべつ せい
一生治らない傷を負ったり、黒い雨を浴びたことによる差別やいじめなど精

しんてき くる
神的な苦しみにあつたりしたそうです。戦争中も戦後もこの広島で必死に生
きてきた人々の気持ちを考えると、どんなに辛かったことでしょうか。
それでも広島の人々は、原子爆弾が落ちた3日後には電車を走らせたり、破壊
された広島の街の復興作業に力を注いだりしました。75年間、草や木が生
えないと言われた広島でしたが、今では、平和大通りなど大きな木が育ち、豊
かな自然に囲まれた平和都市になっています。広島の人々は諦めずに「広島
の街を少しでも明るくしよう。」という気持ちがあつたからこそ、今の広島が
あるんだと思ひました。だから、僕は被爆体験者の方と同じように、世界の人
々に戦争の悲しみを伝えていきたいし、この広島から世界の平和を発信して
いきたいです。

いま げん し ばくだん ねん お げん し ばくだん いりよく ばい
今の原子爆弾は、1945年に落ちた原子爆弾の威力の400～500倍
で、中国・四国地方を全滅させるほどの威力だったそうです。それぐらいの
威力をもつた爆弾が、世界には、1万2500個あります。だから、少
しでも、原子爆弾を含む全ての爆弾がなくなるように、そして、戦争のない世界に
なるように、僕は、この広島から平和な世界を築いていこうと世界に訴えて
いきます。今の地球には、さまざまな問題がありますが、この奇跡で出会っ
た仲間と共に協力してこの地球を守り抜くことが、若い僕達の使命だと、
平和学習を通して強く思ひました。



たいせつ
大切にしたいもの

ひろしま しりつほんかわしょうがっこう はやし あき
広島市立本川小学校 林 亜希

げんしばくだん いちばん し ひばくしゃ かたがた ひばくい
原子爆弾のおそろしさを一番よく知っているのは、被爆者の方々と、被爆遺
こう へいわ たいせつ つた こうせい のこ ひばくしゃ かたがた
構です。平和の大切さを伝えて後世まで残していくのもまた被爆者の方々と、
いこう せんそう おそ つた たいせつ いま へ
遺構です。このような戦争の恐ろしさを伝える大切なものが、今どんどん減っ
てきています。

ひばくしゃ かたがた げんざいひろしまけん やく まん にん ぜんこく やく まん
被爆者の方々は、現在広島県に約1万5000人、全国には約11万300
にん
0人いらっしゃるそうです。しかしこの1年で、約5000人亡くなられて、
ひばくしゃ へいきんねんれい さい こうれいか すす ひろしまし のこ ひ
被爆者の平均年齢も85歳と、高齢化が進んでいます。また、広島市に残る被
ばくじゅもく げんざいやく ぼん さくねん がつ うした きょうばしがわ ご
爆樹木は、現在約160本です。しかし、今年の4月に、牛田の京橋川の護
がんした あやま ぼっさい ぼくしんち
岸下にある「シダレヤナギ」が、誤って伐採されてしまいました。爆心地か
ら2キロメートルのところであり、高さは3メートルほどあったそうです。そ
の「シダレヤナギ」は、ぼっさい か ひばくじゅもく とう
伐採されたあとに枯れてしまったため、被爆樹木の登
ろく と け ひろしまし ない ひばくじゅもく いっぽん へ
録を取り消されたそうです。これで広島市内の被爆樹木は一本減ってしま
いました。

ひばくしゃ ひばくいこう
このように被爆者や被爆遺構がなくなってしまうたら、だれがへいわ かた
継ぐのでしょうか。それはわたしたち そだ わたしたち ひばくしゃ たい
つ
継ぐのでしょうか。それは私達です。ヒロシマで育った私達が、被爆者の体
けん きも う つ ほんかわへいわ しりょうかん のこ ひ くず と
験や気持ちを受け継いで、本川平和資料館に残る、あの日に崩れたり、溶け
たりしてしまっただいこう たいせつ こうせい のこ つづ
た遺構を大切にしていふことで、後世までずっと残り続ける
おも
と思います。そのために、これからもひばく じっそう まな に ど おな ひ
被爆の実相について学び、二度と同じ悲

げきが起こらないよう、^{かんが}考えていかないといけないと思っ^{おも}ています。

わたし ^{ほんかわしょうがっこう} へいわ ^{がくしゅう} へいわ ^{かたがた} ^{げん} ^{しばくだん} ^お
私は、本川小学校の平和学習で、いろいろな方々に原子爆弾が落とされ
^ひ ^{くる} ^{おし} ^{きょうしつ} ^{まな}
た日のことや、そのあとの苦しみに^{おし}ついて^{きょうしつ}教^{まな}えて^{まな}いただき^{まな}ました。教室で学
^{へいわ} ^{きねんこうえん} ^い ^{かた} ^{せつ}
ぶだけでなく、平和記念公園に行き、ピースボランティアガイドの方からも説
^{めい} ^き ^{わたし} ^{ねんせい} ^{とき} ^{ほんかわしょうがっこう} ^{のこ} ^{いれいひ} ^{しりょうかん}
明を聞きました。私が5年生の時には、本川小学校に残る慰霊碑や資料館
^{せつめいかつどう} ^{ねんせい} ^{おこな} ^{げん} ^{しばくだん}
の説明活動を4年生に行いました。原子爆弾についてわかつていたつもりで
^{じぶん} ^{ことば} ^{つた} ^{むづか}
したが、それを自分の言葉でまとめて伝えるのは、とても難しかったです。
^{ことし} ^{ねんせい} ^{せつめいかつどう} ^{おこな} ^{よてい} ^{いま} ^{まな}
今年^{いま}は、1年生に説明活動を行^{いま}って^{まな}いく^{まな}予定^{まな}です。今^{まな}まで^{まな}学^{まな}ん^{まな}できた^{まな}ことを
^い ^{ねんせい} ^わ ^{ことば} ^{はな} ^{かんが} ^{せんじつ}
活^{せんじつ}かして、1年生にも分^{せんじつ}かり^{せんじつ}やすい^{せんじつ}言葉^{せんじつ}で話^{せんじつ}そう^{せんじつ}と考^{せんじつ}えて^{せんじつ}いま^{せんじつ}す。先^{せんじつ}日も、
^{ねんせい} ^{こうてい} ^{おし}
ペア^{おし}にな^{おし}った^{おし}1年生^{おし}に、校^{おし}庭^{おし}の「ニワウルシ」の^{おし}ことを^{おし}教^{おし}え^{おし}まし^{おし}た。「ニワウ
^{かあ} ^{げん} ^{しばくだん} ^{しょくぶつ} ^い ^{もの} ^{たくさん} ^{へい}
ルシ」のお母^{へい}さんが原^{へい}子^{へい}爆^{へい}弾^{へい}にあ^{へい}った^{へい}こと、植^{へい}物^{へい}や生^{へい}き^{へい}物^{へい}が沢^{へい}山^{へい}ある^{へい}のは平
^わ ^{はな} ^{すこ} ^{おどろ} ^{とき} ^{いしき}
和^{いしき}のし^{いしき}る^{いしき}し^{いしき}である^{いしき}ことを^{いしき}話^{いしき}すと、少^{いしき}し^{いしき}驚^{いしき}いて^{いしき}いま^{いしき}す。その^{いしき}時^{いしき}は、意^{いしき}識^{いしき}して
^{へいわ} ^{こうどう} ^{かん}
いま^{かん}せん^{かん}で^{かん}し^{かん}た^{かん}が、これ^{かん}が平^{かん}和^{かん}につ^{かん}な^{かん}がる^{かん}行^{かん}動^{かん}だ^{かん}つ^{かん}た^{かん}ん^{かん}だ、と^{かん}感^{かん}じ^{かん}る^{かん}こと^{かん}が^{かん}で
き^{かん}まし^{かん}た。

わたし ^{ことし} ^と ^{しよ} ^{いん} ^{かい} ^い ^{いん} ^{ちやう} ^か ^が ^く ^{ねん} ^{ひと} ^{へい} ^わ
私は今年、図書委員会の委員長になりました。下学年の人にももっと平和
^{かんしん} ^{へい} ^わ ^{かん} ^{ほん}
について関^{かん}心^{かん}をも^{かん}つ^{かん}て^{かん}も^{かん}つ^{かん}て^{かん}ら^{かん}う^{かん}た^{かん}め^{かん}に、平^{かん}和^{かん}に^{かん}関^{かん}する^{かん}本^{かん}を^{かん}す^{かん}す^{かん}め^{かん}る^{かん}コ^{かん}ー^{かん}ナ^{かん}ー^{かん}を
^よ ^き ^{てい} ^{あん} ^{かんが}
つく^{かんが}つ^{かんが}たり、み^{かんが}ん^{かんが}な^{かんが}に^{かんが}読^{かんが}み^{かんが}聞^{かんが}か^{かんが}せ^{かんが}を^{かんが}す^{かんが}る^{かんが}イ^{かんが}ベ^{かんが}ン^{かんが}ト^{かんが}を^{かんが}提^{かんが}案^{かんが}し^{かんが}たり^{かんが}し^{かんが}たい^{かんが}と^{かんが}考^{かんが}え
^せ ^{かい} ^{じゅう} ^{へい} ^わ ^{げん} ^{しばくだん} ^ひ ^{さん} ^せ ^{かい} ^{じゅう} ^{ひと} ^{つた}
ていま^{つた}す。世^{つた}界^{つた}中^{つた}が平^{つた}和^{つた}に^{つた}なる^{つた}よ^{つた}う、原^{つた}子^{つた}爆^{つた}弾^{つた}の悲^{つた}惨^{つた}さ^{つた}を、世^{つた}界^{つた}中^{つた}の^{つた}人^{つた}に^{つた}伝
^{ひつ} ^{よう} ^{じぶん} ^{なに} ^{かんが} ^{おも}
える^{おも}こと^{おも}も^{おも}必^{おも}要^{おも}です。し^{おも}か^{おも}し、ま^{おも}ず^{おも}は^{おも}自^{おも}分^{おも}に^{おも}で^{おも}き^{おも}る^{おも}こと^{おも}は^{おも}何^{おも}か^{おも}考^{おも}え、思^{おも}い^{おも}や
^{まわ} ^{ひと} ^{なか} ^よ ^{たい} ^{せつ} ^{おも}
り^{おも}をも^{おも}つ^{おも}て^{おも}周^{おも}り^{おも}の^{おも}人^{おも}と^{おも}仲^{おも}良^{おも}く^{おも}し^{おも}て^{おも}い^{おも}く^{おも}こと^{おも}が^{おも}大^{おも}切^{おも}な^{おも}の^{おも}だ^{おも}と思^{おも}いま^{おも}す。そ^{おも}し^{おも}て
わたし ^{ほんかわしょうがっこう} ^{さいこうがくねん} ^{きょうりょく} ^{へい} ^わ ^{はっしん}
私は、本川小学校の最高学年として、みんな^{きょうりょく}で^{きょうりょく}協^{きょうりょく}力^{きょうりょく}して^{きょうりょく}平^{きょうりょく}和^{きょうりょく}を^{きょうりょく}発^{きょうりょく}信^{きょうりょく}して^{きょうりょく}い
き^{きょうりょく}まし^{きょうりょく}す。



いのち よろこ
命に喜びをもって

ひろしま しりつとうじょうしょうがっこう なる せ たいが
広島市立東 浄 小学校 成瀬 太臥

「なぜ生きているのだろう。」

みなさんは、この問いに答えることができますか。これは被爆体験証言者の
たきぐちひでたか はな ことば ことば たきぐち かあ
瀧口秀隆さんが話して下さった言葉です。この言葉は、瀧口さんのお母さん
はな ことば き ことば こた
が話していたそうです。ぼくは、この言葉を聞いたときに、すぐに答えがうか
んでできませんでした。

しょうわ ねん がつ か いっぱつ ぼく たきぐち さい いもうと な
昭和20年8月6日、一発の爆だんで瀧口さんの3才の妹が亡くなりま
した。そのとき、お母さんは必死で妹を守りましたが、その後、妹は亡く
なってしまいました。生き残ったお母さんが言った言葉が「なぜ生きているの
だろう。」でした。今は、ぼくなりのお答えがあります。それは、「やりたいこと
を、自分の意志で決めて自分でするため」です。ぼくは、これから大人になる
までにまだまだたくさんやりたいことがあります。それが自分で決められて、
自分の意志でできることが「生きている」ということだと思えます。

しかし、日本が戦争をしていた時代には、男の人は徴兵されたり、女の
ひと くに こうじょう はたら こ
人も国のために工場などで働かされたりしていました。そして、子どもも、
がっこう せんそう じゅぎょう せんそう
学校で戦争の授業があり、みんなが戦争のために、やりたいことをがまんし
たり、自分の意志でやりたいことを決められなかったりしていました。また、
もっと生きてかったのにいのち うしな ひと
もっと生きてかったのに命を失った人もたくさんいました。

いま じきつ き じぶん じぶん いのち
今は、自殺やいじめなどのことをよく聞きます。それは、自分で自分の命
た ひと きず きず
を絶つということや、人を傷つけたり傷つけられたりしてしまっているとい
うことです。自分で自分の命を絶つということは、よほどいやなことがあつ
たり、追いこまれたりしていたのかもしれない。ぼくは、それがとても悲し
いことだと思います。せんそう じぶん いし き いのち いま
戦争のときに、自分の意志で決められなかった命も今
いのち たいせつ いのち いま いのち ひと つら
の命もどちらも大切な命です。今のぼくたちの命は、いろいろな人が辛い
おも かな おも なか ひっし つづ
想い、悲しい想いをした中でも、必死にバトンをつないでくれたからこそ続い
てきたものです。そんないのち じぶん せんそう
命を、自分でなくしてしまったり、また、戦争でな
くしてしまったりすることがあってはいけません。せんそう ちから ちから
戦争は力と力のぶつか
あ ほか かいけつほうほう せんそう き
り合いで、他にも解決方法があるかもしれないのに、なぜ戦争で決めなくては
ならないのだろうと思いました。たいせつ いのち つぎ
大切につないでくれたこの命を次につなげ
やくめ
る役目がぼくたちにはあります。

だから、ぼくは、生きることに喜びをもっていたと思います。それがいのち
たいせつ いのち つぎ おも
を大切にすることであり、命を次につなげることになると思うからです。自
ぶん つた つた ともだち いけん う と たいせつ
分の伝えたいことをきちんと伝え、友達の意見も受け止めながら大切にしてい
くことが、生きるよろこ おも たきぐち かあ
喜びをもつことだと思います。もう瀧口さんのお母さん
のように「なぜ生きているのだろう。」という人がいなくなってほしいと思
います。みんなでこのきも せかい か おも
気持ちをもてれば、きっと世界は変わると思っています。
みなさん、いっしょ やくめ は
一緒にぼくたちの役目を果たしていきましょう。



せんそう
戦争というおそろしさ

ひろしましりつわ せ だしょうがっこう わたなべ れん たろう
広島市立早稲田小学校 渡部 錬太郎

ねん しょうわ ねん がつ か ごぜん じ ふん
1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。いつものように過

していた朝、ピカッとまぶしい光が出たと思ったら、「ドーン。」というもの

すごい音がひびきました。そのとき、ぼくのひいおばあちゃんは広島市から少

しはなれた庄原市にいました。ひいおばあちゃんには兄がいました。兄は当

時、広島市にいました。だから、ひいおばあちゃんは、広島市の方から聞こえ

た「ドーン。」というものすごい音が何なのか不安になって、ひいおばあちゃ

んのお父さんと一緒に広島市まで汽車に乗っていったそうです。しかし、途

中から汽車が動けなくなり、その後は歩いていったそうです。ひいおばあち

ゃんは、広島市についてからの話をあまり詳しくは話さなかったけれど、最

悪だったそうです。辺り一面が死体やけがをした人であふれていたそうです。

結局探していた兄は見つかりませんでした。そして、ひいおばあちゃんは、

庄原市にもどった後、お肉が食べられなくなったそうです。それほどおそろ

しいものだったのが伝わりました。ぼくのひいおばあちゃんはもう亡くなっ
ています。この話は、ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんに聞きました。だ
からこそ、ぼくたちのような人が語らなければならないと思います。被爆者の
方々が年々減っていく中で、広島市では語り継いでいける人もいることをわ
すれてはいけないと思います。

最近ではイランとイスラエルの戦争、去年はロシアとウクライナの戦争と、
世界中にはまだまだ戦争をしている国があります。ぼくは、「なぜ戦争をして
しまうのか、なぜ戦争をやめられないのか」と疑問に思います。きっと戦争の
おそろしさを知らないからだと思います。戦争をして負ければ何も残らない、
勝っても戦争で受けた被害が残る。それが分からないのは、終わって初めて真
のおそろしさが分かるからだと思います。

「戦争は自分の国を自分で傷つける。」だからぼくは、本当に戦争や「戦争」
という言葉がこの世界から無くしたいです。世界には、「平和」という言葉を
知らない子供たちがたくさんいます。その子供たちに「平和」を教えてあげた
いです。



わす なみだ
忘れられない涙

ひろしま しりつみな み しょうがっこう はまだ そうた
広島市立皆実小学校 濱田 想太

「君たちは捨て石。国のために死ぬのが務めだ。」

せんじちゆう もとしょうねんへい さわの さい とき じょうかん い
戦時中、元少年兵だった沢野さんは、17歳の時に上官に言われました。

このことは、こくりつひろしまげんぼくしぼつしやついつとうへいわ きねんかん かいさい きかくてん
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で開催されている企画展
しょうかい しんぶん きじ し
を紹介した新聞記事で知りました。

ぼくと6歳しか差がない。ぼくは、たいせつ いのち す いし い くに
大切な命を捨て石と言い、国のために
し 死ぬのが務めだということが、しょうじき
正直よくわかりませんでした。ただ、ぼくた
ちと同じ少年が、国のために死ぬということに怒りがおさまりませんでした。

つぎ ひ かぞく いっしょ きかくてん み い じっさい さわの たちもと
次の日、家族と一緒にその企画展を見に行きました。実際に沢野さん達元
しょうねんへい にん しょうげんえいぞう み いんしょうてき くに かぞく
少年兵9人の証言映像を見ました。印象的だったことは、国のために家族
ともだち なに い かくご も とくべつかんぶこうほせい しがん ひと
や友達に何も言わず覚悟を持って特別幹部候補生に志願した人がいたという
ことです。

ひろしましな い くんれん かれ せんじょう い
広島市内で訓練していた彼らは、戦場に行けませんでした。なぜなら、8
がつ か げんしばくだん とうか かれ な ひと あつ
月6日に原子爆弾が投下されたからです。彼らは亡くなった人たちを集めて
も てつだ
燃やす手伝いなどをしたそうです。

せんご ねんた め まえ ひと な おも だ かつ
戦後79年経ったのに、目の前の人亡くなっていくことを思い出し、肩を
ふるわせ泣きながら話していました。ぼくは、90を超えるおじいさんが今で
ときすく ひと おも くる つづ し
もあの時救えなかった人のことを思い苦しみ続けていることを知りました。

ぼくは、ひろしまへいわ きねん しりょうかん に どおとず
ぼくは、広島平和記念資料館に二度訪れたことがあります。

ねんせい はじ おとず とき かお はんぶん や めだま と だ
1年生で初めて訪れた時は顔が半分焼けていたり、目玉が飛び出すのをお
さえていたりしている絵や写真を見てただただ怖かったです。

ねんせい おとず と き へい わ がく しゅう まな しん さんりんしゃ じっさい み
5年生で訪れた時は、平和学習で学んだ「伸ちゃんの三輪車」を実際に見
ました。これに乗って遊んでいた楽しい時間を一瞬でうばわれたことに伸ち
やんの悲しみが伝わってきました。

いま ひろしまへい わ き ねん しりょうかん い ひと いち ど おとず
今まで広島平和記念資料館に行ったことがない人はぜひ一度訪れてほし
い。そして、一度訪れたことがある人は二度目もおとず訪れてほしい。訪れるた
びにきっとあたらしい事実を知り平和への想いがどんどん強くなっていくはず
です。

ことし きゅうひろしまりくぐん ひ ふく ししゅう
今年、うれしいニュースがありました。それは、旧広島陸軍被服支廠が、
れい わ ねん がつ にち く に じゅうようぶん か ざい してい してい まえ
令和6年1月19日に国の重要文化財に指定されたことです。指定される前
はしきん などの問題で取りこわされる可能性もありました。ぼくは、げんしぼくだん
よってあの厚い鉄のとびらが熱風でゆがんでいるすがたをおおひとみに
見せてもら
いたいです。

じつぶつ み ひと かならず とうじ ひとびと いた そうぞう
実物を見た人々は必ず、当時ここにいた人々の痛みを想像するでしょう。

せ かい いま せんそう つづ ちく
世界では、今でも戦争が続いています。パレスチナのガザ地区とイスラエル
の戦争でアメリカの下院議員が「長崎や広島のようなべきだ。早く終わら
せられる。」とげんしぼくだんとうかをうながすはつげん発言をしたそうです。その
ご かく しよう い と しゃくめい げんしぼく
後、核の使用をうながした意図はないと釈明しました。ぼくは、まだ原子爆
だん せんそう ひつよう おも ひと しん
弾が戦争に必要なだと思っっている人がいるということが信じられません。

わす
だから、ぼくは忘れない。

せんそう きず いま くる ひとびと なみだ
戦争で傷つき今なお苦しんでいる人々の涙を。

つた つづ
そして、ぼくは伝え続ける。

ひ ぼくしゃ いた そうぞう おも う つぎ せ だい
被爆者の痛みを想像し、想いを受けつぎ次の世代へと。

ひ ひと ひと く に く に い けん わ あ ひ かならず くる しん
いつの日か人と人、国と国が意見を分かち合える日が必ず来ると信じて。



えがお せかい きず
笑顔でいられる世界を築くために

ひろしましりつうじなしょうがっこう まつもと さわ
広島市立宇品小学校 松本 紗和

チコちゃん

あなたにもしものことがあったら^{はなわ}花輪を

あげるよと たわむれていた^{こと}事が^き気になっていました。

せんばづる お とど
千羽鶴を折っても チコちゃんに届くはずもない

ただ ^{わたし}私の^{なぐさ}慰め^{おも}だけ^{ささ}と思いつつ^{ささ}捧げます。

あの日 ^ひあなたは^{げり}下痢^{たいちょう}で ^{たいちょう}すごく^{たいちょう}体調^{たいちょう}が

^{わる}悪く^{やす}休む^{やす}はず^{やす}だった^{やす}のに

わたし ^{ひとこと}私の^{しち}一言^{はし}が ^{しち}あなたを^{はし}死地^{はし}に^{はし}走^{はし}らせた^{はし}のです。

と ^ま戸の^みすき^{さいご}間^{すがた}から^{むぎ}見た^{ぼうし}あなたの^{むす}最後^{こぼし}の^{こぼし}姿^{こぼし} ^{こぼし}麦^{こぼし}わ^{こぼし}ら^{こぼし}帽子^{こぼし}を^{こぼし}結^{こぼし}び^{こぼし}ながら^{こぼし}小^{こぼし}走^{こぼし}

りに^さ去^{すがた}った^{わす}姿^{わす}が^{わす}忘^{わす}れ^{わす}られ^{わす}ませ^{わす}ん。ゴ^{わす}メン^{わす}ナ^{わす}サイ。ゴ^{わす}メン^{わす}ナ^{わす}サイ。

あの日から^ひ頭^{あたま}の^{あたま}どこ^{あたま}かに ^{わす}いつも^{わす}忘^{わす}れ^{わす}られ^{わす}ない^{わす}悔^{わす}恨^{わす}です。

これは、^{わたし}私の^{そうそぼ}曾^{げんし}祖^{ばくだん}母^なが^な原^な子^な爆^な弾^なで^な亡^なく^なした^な妹^なに^な宛^なて^なた^な手^な紙^なです。あ^なの日^な、

^{そうそぼ}曾^{ばくしんち}祖^{はな}母^{はな}は、^{はな}爆^{ぐも}心^み地^みから^み離^みれた^みと^みころ^みから^みき^みの^みこ^み雲^みを^み見^みま^みした。そ^みの時^み、^み2^み才^み下^み

の^み妹^みは^み爆^な心^な地^なの^な真^な下^なに^なあ^なる^な学^な校^なに^ない^なた^なの^なです。仲^なの^な良^なか^なつ^なた^な妹^なを^な亡^なく^なし

た^な曾^{そうそぼ}祖^{かな}母^くは、^{かな}悲^ひし^{まい}みに^{ちくる}暮^{わす}れ、^{わす}あ^{わす}の日^{わす}から^{わす}毎^{わす}日^{わす}苦^{わす}し^{わす}ん^{わす}で^{わす}き^{わす}ま^{わす}し^{わす}た。私^{わす}たち^{わす}家^{わす}族^{わす}

には^わと^わと^わも^わよ^わく^わ分^わか^わり^わま^わす。特^わに、^わ妹^わの^わい^わる^わ私^わは、^わ想^わ像^わす^わる^わだ^わけ^わで^わ悲^わし^わみ

が^{あふ}溢^{あふ}れ^{あふ}て^{あふ}き^{あふ}ま^{あふ}す。

げんざい ^{さい}現在^{そうそぼ}、^{すこ}9^{まえ}5^{まえ}歳^{まえ}の^{まえ}曾^{からだ}祖^{うご}母^{うご}は、^{うご}少^{うご}し^{うご}前^{うご}ま^{うご}で、^{うご}「^{うご}体^{うご}が^{うご}動^{うご}く^{うご}う^{うご}ち^{うご}は。」^{うご}と^{うご}度^{うご}々^{うご}平^{うご}和^{うご}記^{うご}

ねんこうえん おとず
念公園を訪れていました。

「この世にあれば素晴らしい人生があったでしょうに…御浄土で安らかに眠ってください。」

この思いを妹に届けようと何度も何度も手を合わせたのかもしれない。
どんなにつらかったことでしょう。

今、私は、曾祖母が私たち家族まで命をつないでくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。だからこそ、「平和への思い」を受け継ぎ、多くの人に伝えていくことを考えています。

この大きな役目を果たすために、私にできること。それは、一日一日や「今」を大切に過ごすことです。楽しくてワクワクする日もあれば、悲しい日もあります。でも、この一日一日が、未来につながっているということを曾祖母が教えてくれました。「過去の日」を後悔しないよう、友達とけんかしてしまった時には、自分から声をかける勇気を持ちたいと思います。また、普段から、人の気持ちを想像できる優しさも大切にしていきます。相手の立場になって考えることができれば、みんなで「今」この時を楽しく過ごすことができ、「もう一日一緒にいたかったのに。」と悲しみを引きずることがなくなるのではないのでしょうか。未来でも笑顔でいられるように私は今を大切にしていきます。

広島では、たった一つの原子爆弾により、約14万人の人々の命が失われました。その中に、曾祖母の妹のチョコちゃんの尊い命も入っています。このことを胸に私は曾祖母の思いを継承し、これから行動に移します。

多くの人が、ずっと笑顔でいられる世界を築いていけるように。



あたり前の日常

ひろしまだいがく ぶぞくしょうがっこう うちだ はるき
広島大学附属小学校 内田 陽輝

ひろしま みどりゆた かわ しぜん まち ぐんこう きち
広島は、緑豊かで川がたくさんある自然の町でした。また、軍港や基地も
ある重要な町でした。そして、とてもにぎわっていて、笑顔あふれる希望の
町でした。しかし、夏のある日、そんな日常をこわしていった、たった一発
の爆弾。その力は、通常の約16キロトンに相当するといえます。その爆
弾から様々な影響を受け、それでも被爆者たちは、あの日から、何度も立ち
上がっていきました。

そうそぼ げんき たの ひと そうそぼ ひばく
ぼくには、曾祖母がいました。元気で楽しい人でした。そんな曾祖母も被爆
者の一人でした。その日は、工場へ働かされに行くところだったといえます。
ぜんじつ ほか ともだちふたり でんてい ま あ やくそく
前日に、他の友達二人と電停で待ち合わせをする約束をしたそうです。しかし、
ともだち ひとり おく そうそぼ でんしゃ はっしや
友達の一人が遅れてしまい、曾祖母も、もう電車が発車しそうだったので、あ
きらめようとなりました。その時、先に来ていた友達が、
「はやく来て。」

い じょうしゃ ご げんぱく お
と言ったので、ぎりぎりです。その後、原爆が落とされま
した。遅れてしまった友達は亡くなり、乗車できた曾祖母と友達は爆心地か
ら離れたため、助かったのです。友達のせかした一言で運命は大きく変わった。
ひとこと そうそぼ いのち すく いま げんき せいかつ おも
あの一言が曾祖母の命を救い、今、ぼくが元気に生活しているのだと思いま
す。この話を聞いた時、ぼくは、本当におどろきました。そして、生き残っ
た曾祖母は、「被爆者」という、重大な使命を担って生きました。一歩ちがえ
ば、自分は生きていなかった。そんなおそろしさがある、戦争。常に「死」
ととなりあわせである戦争は、どれだけ多くの人を悲しませてきたので

しょうか。

このように、あたり前が一瞬のうちに破壊されたあの日。もう二度とこの
ようなことがあってはならない。だから、今でも多くの方たちが平和のために
活動しています。しかし、幸せで平和な日々があたり前だと感じるようにな
り、平和に対する意識がうすくなっているのではないのでしょうか。昔と比べ、
日本は、とても平和になりました。でも、平和があたり前だと思い込み、平和
の大切さが軽視されるようになったのだと思います。「平和があたり前であ
る。」それがどんなに幸せか。被爆者や戦争経験者が一番よく知っています。
しかし、年々原爆や戦争について語れる人が少なくなっています。だからと言
って、その人たちが声をあげて伝えている「戦争を繰り返してはならない。」
「永久平和を願いたい。」という願いは忘れてはならない、平和への意識がう
すくなつてはいけません。それを防ぐためには、当時の様子を記録したり、
話を聞いたり、周囲の人に広めていくこと、さらには、そのような行動を継
続し、後世に伝えていくことが大切です。この「ヒロシマ」の地に生まれたか
らには、ぼくはこれから被爆の実相を伝えていきます。

今でも、自国の利益や思想の違いなどのために大切な命をうばっていく
「戦争」が起きています。また、核兵器を保有していたり、製造していたりす
る国もあります。過去の過ちを反省せず、自国の強さを他国に見せつけ、優
位に立つことにどんな意味があるのでしょうか。強さを見せるために核兵器
を持ち続ける、だから戦争はなくならないのです。ここで、ぼくたちが、「戦
争はしない」「核兵器は要らない」と声をあげなければいけません。

みんなの笑顔があふれ、あたり前の日常を守り、一つ一つの命が大切にさ
れる世界をつくるのはぼくたちです。



かな つづ せんそう
悲しみが続く戦争をなくすために

ひろしまだいがく ふぞくしのめしょうがっこう いぎ
広島大学附属東雲小学校 伊木 けい

しょうわ ねん がつ か ごぜん じ ぶん
昭和20年8月6日、午前8時15分。

いっばつ げん し ばくだん いのち みどりゆた
たった一発の原子爆弾により、たくさんの命がうばわれました。緑豊かな

しぜん ひろしま まち いっしゆん や のはら
自然あふれる広島町は、一瞬にして焼け野原になりました。

わたし そぼ じっか きゅうなかじまほんまち いま へいわ きねんこうえん なか
私の祖母の実家は旧中島本町、今の平和記念公園の中にありました。レス

トハウスの西どなりで「大津屋」という呉服店を営んでおり、すぐ近くに母
屋もありました。

げん し ばくだん どうか な ひとり そぼ あね ど ひきくえ
原子爆弾が投下され、亡くなった一人に、祖母の姉「土肥菊枝」さんがいま

す。菊枝さんは、県立広島第一高等女学校1年生の時に、学徒動員に出ていた
ところ、原爆が落ち、12歳で亡くなりました。

なかく こ ちょう さぎょう じょうほう にち
中区小あみ町で作業をしていたのではないかという情報があり、12日

後の8月18日、海田町に疎開していた祖母は、お母さんに連れられ、菊枝
さんがいたと聞いた防空ごうを訪ねました。すると名前入りの生徒手帳が見

つかりました。しかし、遺骨は見つかりませんでした。その菊枝さんの生徒手
帳は、現在、原爆資料館に保管されています。

とうじ おさな そぼ きくえ きおく べんきょう
当時、若い祖母に菊枝さんの記憶はありませんが、勉強ができ、きれいな

方だと聞いて、今も自まんのお姉さんだとうれしそうに言います。祖母は、
もし戦争がなく原子爆弾が落とされていなければ、土肥の家もお店もはんじ

ょうしつづけて、家族みんなが幸せに、仲良く暮らし続けていただろうと、涙
を流しながら、私に教えてくれました。

ひろしまし ない おお わか がくせい がくとどういん げんばく ぎせい
広島市内では多くの若い学生が、学徒動員のさなか原爆の犠牲になりました

わたしには、いま こうこう ねんせい あに あに かぞく ともだち たいせつ ひと
た。私には、今、高校3年生の兄がいます。兄や家族、友達など大切な人が、
もし犠牲になっていたと かんが えると、むね くる
胸が苦しくなります。

そ ぼ なみだ のこ かぞく じ かん かな つづ
祖母の涙から、残された家族たちは、時間がたっても悲しみが続くことを
し
知りました。

そのような、かな う せんそう いま せ かいじゅう ぼ しょ つづ
悲しみを生む戦争は、今も世界中いろいろな場所で続いでい
ます。それぞれの国の くに かんが かんが かに じ ごく り えき まも へい せ かい
考え方、自国の利益を守るため、争いは続いています
が、おたが みが みと あ り かい すこ へい わ せ かい
互いを認め合い、理解することができたら、少しでも平和な世界になる
おも
と思います。

わたし ことし い だいに じ せ かいたいせん にく あ
私は今年ハワイへ行きました。第二次世界大戦では、憎しみ合ったアメリ
ひとたち いま しんせつ わたしたち う い にく
カの人達ですが、今ではとても親切に、私達を受け入れてくれました。憎し
の かんが かに か きも か
みを乗り越え考え方を変わると、気持ちも変わっていったのではないでしょ
うか。

このことは、みぢか がくせいせいかつ あ いけん あ とき
身近な学生生活にも、当てはまります。意見が合わない時でも、
あいて たち ば かんが あいて い ぶん り かい
相手の立場になって 考えてみると、相手の言い分が理解できることもあり
ます。

せんそう う げんいん くに どうし り えき かんが
戦争を生む原因として、「国同士の利益」を 考えるとゆずれないことがある
おも ひと どうし つ あ
と思いますが、「人同士の付き合い」だと、ゆずり合ったり、尊重し合ったり
できるとおもいます。まずは、ひと ひと たいせつ なかよ あいて
人と人とのつながりを大切に仲良くすると、相手
くに ぶん か かんが かに り かい せんそう おも
の国の文化や考え方も理解でき、戦争はなくなっていくのではないかと思
います。

わたし しょうらい せ かいじゅう くに い にほん けいけん たの
私は将来、世界中たくさんの国へ行き、日本ではできない経験を楽しみ
ながら、くに ひと たち たいせつ し なかよ
その国の人達が大切にしていることを知り、仲良くなりたいです。

せんそう お かな つづ せんそう お
戦争は終わっても、いつまでも悲しみが続きます。だから、戦争を起こさな
どりよく
い努力をしていきたいです。



ひいおじいちゃんから受け継いだ平和のバトン

ひろしましりつてん ましょうがっこう やまさき みずき
広島市立天満小学校 山崎 水稀

すうねんまえ だいす
数年前、大好きだったひいおじいちゃんが亡くなりました。ひいおじいちゃん
は、せんそうけいけんしゃ せんそう せんそう せんそう
は、戦争経験者です。昔、兄と姉はこんな話を聞いたそうです。

ひいおじいちゃんは、せんじちゆう とっこうたい くんれん う
ひいおじいちゃんは、戦時中、特攻隊の訓練を受けていました。戦争も終
ばん はい
盤に入り、ついに、ひいおじいちゃんにもその番がやってきました。お国のた
めにと た ばん
めに飛び立つ番がきたのです。飛び立つということは、みづか し
自ら死にゆくこと。
ひいおじいちゃんは、か ごしまけん ちらん まち と た よてい
ひいおじいちゃんは、鹿児島県の「知覧」という町から、飛び立つ予定でした。
しかし、と た ちよくぜん せんそう お むか しゅつげき す
しかし、飛び立つ直前に、戦争は終わりを迎え、出撃せずに済みました。生
のこ
き残ったひいおじいちゃんは、さき と た し
先に飛び立ち死んでしまった仲間のことを、年
をとってもわす
をとっても忘れることができなかつたそうです。ふくざつ しんきょう かな にく
複雑な心境で悲しみや憎し
みのこ
みを乗り越えて、残りのじんせい す
人生を過ごしたようです。

ひいおじいちゃんのじだい せんそう がっこう い
ひいおじいちゃんの時代は、戦争のため、学校に行くことができませんでした
た。まな まな
た。学びたくても学べなかつたひいおじいちゃんは、あね い
姉たちにこう言ったそう
です。

なかま あそ まんぞく まな
「仲間と遊び、満足に学べることは、とてもありがたいことだ。まな とき
学べる時に
しっかりまな あそ とき
まな あそ
しっかり学び、遊べる時にしっかり遊びなさい。」

せんそうたいけん はなし わたし ちい ちよくせつ き
この戦争体験の話をしてきていたころ、私は小さかったので、直接聞い
き おく
た記憶がありません。あに あね み ま い
兄と姉は、お見舞いに行くたびにこの話を聞いていた
と、わたし おし
と、私に教えてくれました。ひいおじいちゃんにとってこの話は、これから

生きていく 私たちに伝え残しておきたい大切なことだったのだと思います。

ひいおじいちゃんが戦争で死んでしまっていたら、祖父も、母も、そして、私

もこの世にはいません。そう考えたら、とても怖いのです。命は尊いものだ、

私は強く感じました。

私は、満足に学べて、しっかり遊べることはありがたいことだと思いまし

た。簡単に「めんどくさい」「だれかがやればいい」などと言わず、まずチャ

レンジしてみることが大切だと感じました。困っている人を、周りの目を気に

せず自分の意志で助けることのできる人になりたいと思います。

この話を多くの人を知り、戦争とはたくさんの人の命を奪う悲惨なもの

だということを、次の世代に伝えていくことが、私たちの使命だと思っています。

戦争を経験した方が高齢となり、その体験を伝えることが難しくなっている

現状は、だれにも止められません。私にひいおじいちゃんの話をしてくれ

た兄や姉のように、私もその大切な思いを伝える一人になりたいと思います。

世界平和と人類みんなの幸せを、ひいおじいちゃんは今も天国で願っている

と思うからです。世界では、今も残酷な戦争が行われています。戦争のある地

域の子どもたちは、ひいおじいちゃんのように、満足に学びも遊びもできてい

ないと思います。だからこそ、平和への思いを世界中の人に知ってもらい、

みんなで引き継いでいくことが大切だと思いました。これからは私たちの番。

ひいおじいちゃんから受け継いだ平和のバトンと願いを、私も精一杯つなげ

ていきたいです。



ひとごと 他人事をなくすために

ひろしま しりつみなみかんおんしょうがっこう てらだ けいた
広島市立南観音小学校 寺田 啓太

あさ がっこう き ともだち べんきょう きゅうけい
朝、学校に来たら友達とおしゃべり。そして、みんなで勉強をして、休憩
じかん ともだち す いえ かえ いっしょ ひろしま せいかつ いま
時間も友達と過ごし、家に帰るときも一緒です。そんな広島での生活も、今で
はとっくにいつもの風景になっています。ぼくが2年生のとき、広島に転校す
ることになり、とてもおどろ びっくりしました。ぼくは、ひろしま う
となりの岡山県へ行くことになりました。

おかやま げん し ばくだん かんが き かい がつ か
岡山では原子爆弾について考える機会はありませんでしたし、8月6日は
いつも通りの夏休みを満喫していました。両親から広島に転校することが決
まったと聞き、ぼくがさいしょ おも 最初に思ったことは、『大親友の友達と別れるのがさび
しい』ということでした。

そして、れいわ ねん がつ にち ひろしま ひ こ てんにゅう てつづ
そして、令和2年7月31日、広島に引っ越してきました。転入の手続き
のために がっこう い せんせい
学校に行くと、先生から、

なんにち どうこう
「何日から登校しますか？」

き どうぜん なつやす あ おも しつもん せんせい
と聞かれ、ぼくは、当然夏休み明けからとと思っていると、質問した先生から、
ひろしま し がつ か どうこう び
「広島市では、8月6日は登校日ですよ。」

つづ い どうこう び き ぎょう じ
と続けて言われました。ぼくは、登校日と聞き、それはどんな行事なんだろ
うと、がつ か い おも
8月6日から行きたいと思いました。

そして、がつ か どうこう はじ あ ともだち さいしょ よう
そして、8月6日、登校しました。初めて会う友達は、最初びっくりした様
す 子でしたが、ぼくのことを あた た むか
温かく迎えてくれました。すぐに、

ともだち
「友達になろう。」

い ひと
と言ってくれる人がいて、とてもうれしかったのを今でも覚えています。ぼく
は、じぶん し ひと き す なかま やさ むか
自分の知らない人が来たとしてもともに住んでいる仲間として優しく迎
えること、ひと ひと
人と人がつながること、これが平和だと感じました。

その日は、平和集会有りました。ぼくは、夏休み中なのに学校に来て、平和について考える機会がある広島の小学校に感心しました。平和集会以外にも、「平和学習」という授業があり、岡山にいたころには知らなかったことを学習し、広島に来て初めて平和について考える機会となりました。

そこで、ぼくは考えました。平和について、広島に住む人以外はどう思っているのだろうか、もしかしたら、他人事なんだろうか。なぜなら、岡山にいた頃のぼくは、戦争について詳しく知っていたとは言えません。もしかしたら、「となりの県に原子爆弾というものが落ちたんですよ。」ぐらいのことは知っていたかもしれないけど、深く学ぶことはなかったのではないかと思います。

そこで、ぼくは5年生の総合的な学習の時間で「戦争や原子爆弾、平和についてたくさんの人に知ってもらおう」という学習をしたときに、広めるべき相手はぼくが通っていた岡山の小学校の仲間がよいのではないかと考えました。

「広島に原子爆弾が落とされたことにより、どんな被害があったのか。」「広島に原子爆弾が落とされた後、どのように復興していったのか。」ということ詳しく調べるために、広島平和記念資料館に行きました。そして、調べた内容を整理して、資料にまとめ、ぼくが2年生まで通っていた岡山の学校に送りました。

返ってきた感想は、「原子爆弾の怖さを改めて感じた。」という意見がたくさんありました。ぼくは、岡山県の小学生の仲間が原子爆弾の恐ろしさについて知ってくれたことを、とてもうれしく思いました。

今、ぼくたちだからできることの一つとして、原子爆弾のことをよく知らない人たちに向けて、いろいろな方法で原子爆弾の恐ろしさや戦争の悲惨さを伝え、そして広め、「広島で起きた昔の出来事」という他人事で終わらせないよう繋いでいくことが、広島に住むぼくたちの役割だと思ひます。



しあわ わ 幸 せの輪

ひろしま しりつ なかすじ しょうがっこう おかむら そうま
広島市立中筋小学校 岡村 颯真

あなたは身近な人を幸せにするために、どんな事を心がけて過ごしていますか。きっと多くの人々が、その事について深く考えたり意識したりしないまま日々を送っていると思います。明日がやってくることに何の疑いも持たず、未来に向かって夢や希望を持って過ごしている事でしょう。しかし、そんな日々は決して当たり前ではなく、先人たちによって築かれた有り難い日々であるということを忘れてはいけません。

広島に原子爆弾が投下されてから79年が経ちました。あの日、たった一発の爆弾によって、多くの人々の命が、体が、心がうばわれ、広島は原形を留めないほど破壊されました。犠牲者の中には、僕たちと同じ年頃の子供達もいた事でしょう。きっと彼らも、今を生きる僕たちと同じように明日を楽しみに生きていたでしょう。一しゅんにして夢や希望をうばわれ亡くなった子供達は、どれほど無念な思いだったでしょう。そして、大切な人を失い、焼け野原となった広島で、残された人々は立ち上がる気力すら無くしていたのではないのでしょうか。

それでも広島の人々は、生きていくために立ち上がり、広島は街の復興に向けて、力を合わせて下さいました。そのおかげで、今の広島は、かつて原爆が投下された街とは思えないほどの復興をとげ、緑豊かで、人々の活気あふれる平和な街へと発展しました。

そんな幸せな日常を取りもどした広島で、僕たちは今平和について学んでいます。僕は4年生の時に、平和記念資料館を見学し、原爆で亡くなった

かた いひん み なか いちばんいんしょう のこ
方の遺品を見ました。その中でも、一番印象に残ったのは、ハンドルがぐに
やりと曲がった真っ黒に焼けこげた三輪車です。それを見て、その一しゅんで
どれほどの熱風と圧力が加わったのだろうと恐ろしく感じました。更に、授
ぎょう なか げんばくとう かとうじつ まち ひとひと ようす み あと ひ
業の中では、原爆投下当日の街や人々の様子を見た後、クラスのみんなで被
ばく さんじょう はな あ いけん はつびょう ぼく じゅ
爆の惨状について話し合ったり、意見を発表したりしました。僕は、その授
ぎょう とお ぼくたち いま あ まえ おも ひび じつ とうと
業を通して、僕達が今当たり前に思っている日々が、実はとても尊いものだ
という事に気が付きました。

それでは、戦争の資料を見たり、話し合ったりする事以外に、小学生の僕
たちにできる事は無いのでしょうか。

いいえ、あります。僕たちには、平和の実現に向けて確実にできる事があり
ます。

まず、自国や他国の文化や歴史を学び、その違いやたがいの良さに気付く事
ができます。そして、自分が学んだ事を家族や友達に伝える事ができます。そ
れをきっかけにして、一人一人の心の中にあるそれぞれの思いや考えを話
し合う事もできます。

平和を実現させるためには、一人一人が普段から相手の話をよく聞き、意
けん そんちょう とも あゆ たいせつ おも ぼく ところ ひ
見を尊重し合い、共に歩むことが大切だと思います。僕は、そう心がけて日
び す こと み ちか ひと しあわ こと おも
々過ごす事こそ、身近な人を幸せにするという事につながると思います。

一人一人の力はどんなに小さくても、その力を合わせ、つなげていくこと
ででき上がった小さな輪は、やがて大きな輪になっていきます。その大きな輪
は、たくさんの人を結びつける、幸せの輪となることでしょう。

ぼくは、人と人が笑顔で話したり、困っている人に手を差し伸べたりするこ
とで、幸せの輪を世界中に広げていきたいです。

平和の実現に向けて、僕はこれからも一歩ずつ歩んでいきます。



こころ
心をひとつに

ひろしま しりつ ぎ おんしょうがっこう かとう あきら
広島市立祇園小学校 加藤 晶

わたし せんそう ひとり お へいわ ひとり
私は、戦争とは一人では終わらせることができないもので、平和とは一人

じつげん おも
では実現することができないものだと思います。

ねんまえ がつ か ひろしま へいおん にちじょう とつぜん はいいろ せかい か
79年前の8月6日、広島の平穏な日常は、突然、灰色の世界と化しまし

かぞく ゆうじん うしな ひとびと わたし い のこ じぶん
た。家族や友人を失った人々は、「どうして私が生き残ったの。」と、自分を

せ つづ ころ きざ ふか きず いっしょうのこ つづ いま ひばくしゃ
責め続けました。心に刻まれた深い傷は一生残り続けます。今でも被爆者の

かたがた きず い
方々の傷は癒えていないのです。

わたし そうそふ ながさき げんしばくだん どうか しゅうかんご にゅうし ひばく
私の曾祖父は、長崎に原子爆弾が投下された1週間後に入市被爆しまし

ひろしま おな はいいろ まち ねえ かぞく ひつし さが
た。広島と同じく灰色になった町で、お姉さんとその家族を必死に探しました

さが まわ み わたし たいせつ ひと ひとつ
が、どれだけ探し回っても見つかりません。もし、私の大切な人がある日突

ぜん まち すがた け ふあん かな こころ こわ そうそふ
然、町ごと姿を消したなら、不安と悲しみで心が壊れてしまいます。曾祖父

ねえ いえ おも ばしょ かぞく おな かず いし ひろ
はお姉さんの家があったと思われる場所から、家族と同じ数の石ころを拾い

あ たいせつ も かえ はか おさ そうそふ なに おも
上げ、大切に持ち帰り、お墓に納めました。曾祖父は何を思ってそうしたのか、

き き わずら なが くる とうびょうせいかつ すえ さい
もう聞くことはできません。がんを患い、長く苦しい闘病生活の末に57歳

せ さ ほうしゃのう げんいん わ あと
でこの世を去りました。放射能が原因だったと分かったのは、ずいぶん後だっ

そぼ き
たと祖母から聞きました。

ひろしま おおぜい にゅうし ひばくしゃ し とき へいき う
広島でも大勢の入市被爆者がいると知った時は、どうしてこんな兵器が生

まれ、^{いま}今も^{そんざい}存在するの^かと、^{おお}大きな^{きょうふ}恐怖と^{ふか}深い^{かな}悲しみを^{かん}感じました。なぜ^こんな^{さんげき}惨劇が^お起こった^{のか}。誰^{だれ}も^と止められ^ななかった^{のか}。きっと、^{せんそう}戦争に^{はんたい}反対^して^{いた}人も^{ひと}いた^でしょう。しかし、^{ひとり}たった一人^がど^れだけ^{こえ}声を^あ上げて^も戦争^{せんそう}は^お終わ^りませ^ん。平和^{へいわ}は^{じつげん}実現^{でき}ない^のです。

^{ふっこう}復興^とを^{ひろしま}遂^{まち}げた^{へいわ}広島^{にちじょう}の^と町。平和^とな^{もど}日常^を取^り戻^{した}い^{とい}う^{ひと}人々^の前^{まへ}向^むきな^き気^も持^いちは、^{いま}今^もも^{つづ}続^{いて}い^ます。その^{まいとし}ひと^がつ^が毎^{かいさい}年^は5^{へいわ}月^はに^{はな}開^催さ^{れる}る^{へいわ}平和^とと^{はな}花^の祭^{さい}典^{てん}「^{わたくし}フ^ラワ^ーフ^ェス^{ティ}バ^ル」^{です}。私^もフ^ラワ^ーフ^ェス^{ティ}バ^ルに^{さん}参^加した^{こと}が^あり^ます。習^{なら}い^{ごと}事^のダ^ンス^を披^{ひろ}露^させ^ても^らえ^る事^にな^った^のです。本^{ほん}番^{ばん}は、と^とも^{きん}ち^{ょう}し^ました^が、仲^{なか}間^まと^{いき}息^あを^あわ^せて^うま^くお^どり^きる^事が^{でき}ま^した。私^{わたし}は^とフ^ラワ^ーフ^ェス^{ティ}バ^ルを^{とお}通^{して}、誰^{だれ}か^と何^{なに}か^を成^なし^とげ^る事^で絆^{きず}な^を深^ふめ、お^た互^がい^の気^き持^もち^を尊^{そん}重^{ちよう}する^{たい}大^{せつ}切^しさを^し知^りま^した。この^き気^も持^ちが^{あら}争^いを^{なく}し、平和^{へいわ}に^つな^がる^ので^はな^いで^しょう^か。

^{ひとり}一人^の力^{ちから}で^{でき}る^{こと}は、^{すこ}ほん^の少^しです。でも、^{ひとり}一人^{ふたり}、二人^と協^{きょう}力^{りよく}し^あ合^なえ^る仲^{なか}間^まが^ふ増^えた^{なら}、^{こんなん}ど^んな^た困^む難^{ちから}にも^う立^ち向^かえ^る力^が生^まれ^ます。

^{へいわ}平和^{とは}、^{ひとり}一人^{じつげん}では^{はんたい}実^{きょうりよく}現^{でき}ない^{もの}、^{はんたい}反^{はん}対^{たい}に、^{みんな}み^んな^で協^{きょう}力^{りよく}する^{こと}で^{じつげん}実^{じつ}現^{げん}でき^るもの^{です}。あ^の惨^{さん}劇^{げき}を^の乗^こり^こ越^えて^つな^いで^きて^もら^った^{この}命^{いのち}、^{こころ}心^をひ^とつ^にし、あ^の日^ひに^あっ^たこ^とを^{けつ}決^{わす}して^{わす}れ^ず、平和^{へいわ}の^{とうと}尊^{つた}さ^をを^{つづ}伝^{つづ}え^続けて^いき^まし^{ょう}。

Commitment to Peace

August 6, 2024

Close your eyes and imagine:

a beautiful city of verdant green, a shopping street full of people, smiling faces across the town. Hiroshima 79 years ago was filled with people living colorful day-to-day lives, much like today.

On 8:15 am on August 6, 1945,

there was a great, eardrum-splitting roar
and a vermillion cloud tinged with black rose into the sky.

People and plants alike were blackened in the blaze and the city was drowned in cries for help and tears of despair.

In the words of one *hibakusha*, Hiroshima on that day was hell on earth.

The atomic bomb stole the color from their lives and turned Hiroshima into a world of ash gray.

My great grandmother was a *hibakusha*, but she never spoke of that day.

Sorrowful memories, too painful to put into words, still continue to torment many of the *hibakusha* today, 79 years later.

Even now, wars continue to plague the planet.

Around the world, those who didn't want to die are dying,
and people are losing loved ones who were supposed to be there with them day after day,
much the same as it was 79 years ago.

Is there really no other way?

Peace will not come from prayers alone.

It is up to us to protect our colorful day-to-day lives and build peace.

Listening carefully to others,

viewing differences as a good thing and reconsidering your perspective,
cooperating with friends to accomplish a goal:

these are all steps that each of us can take toward peace.

Now is the time for us to learn about and experience Hiroshima together.

Visit the Peace Memorial Museum, listen to the words of the *hibakusha*,
and discuss the preciousness of peace and the importance of life with family and friends.

Here, we take one step forward to world-changing peace.

Children's representatives:

Kato Akira (6th year, Hiroshima City Gion Elementary School)

Ishimaru Yuto (6th year, Hiroshima City Yahata-Higashi Elementary School)